

留学生のキャリア形成と「JLPT問題」 — 複言語・複文化能力を強みにできないジレンマの語りから —

松本明香（東京立正短期大学）・家根橋伸子（東亜大学）

1. 研究の背景と目的：日本の高等教育機関に入学・在籍する留学生のキャリア意識の希薄さが問題になっている（寅丸他2018）。国内大学・短大卒業後、日本での就職を目指す留学生が感じる就職時の「不可解さ」について語る声に着目する。その「不可解さ」の一つにJLPTのN1、N2取得が重要視されるシステムがある。彼／彼女らの語りから、**日本でキャリア形成を進めようとする留学生にJLPTが重視されることがどのように作用するか、その「不可解さ」に留学生はいかに対応しながら就職活動を行っているのか**を考察した。そこから言語教育から人間形成まで視野に入れた中でキャリア形成の支援者ともなりうる日本語教師が、いかに留学生のキャリア支援をしていけるのか、そのあり方を再考することを本研究の目的とした。

2. 調査の概要：留学生に対し、キャリア意識やキャリア形成に焦点を当てたライフストーリー・インタビューを実施。本発表ではベトナム出身の四年制大学元留学生Aさん、中国出身の短大元留学生Sさんの2名の語りを対象に、留学生のキャリア形成意識における「JLPTの意味」を焦点に分析した。
※2019年度「外国人留学生在籍状況調査結果」(コロナ前)出身国(地域)別留学生数 1位中国(124,436人; 39.9%) 2位ベトナム(73,389人; 23.5%)
Sさん：中国上海出身の首都圏短大の2年生。現在は日本国内の大手通信会社の子会社に勤務。
Aさん：ベトナムの地方都市出身の地方私立大4年生(インタビュー時)。現在は日本国内の日本語学校に勤務。

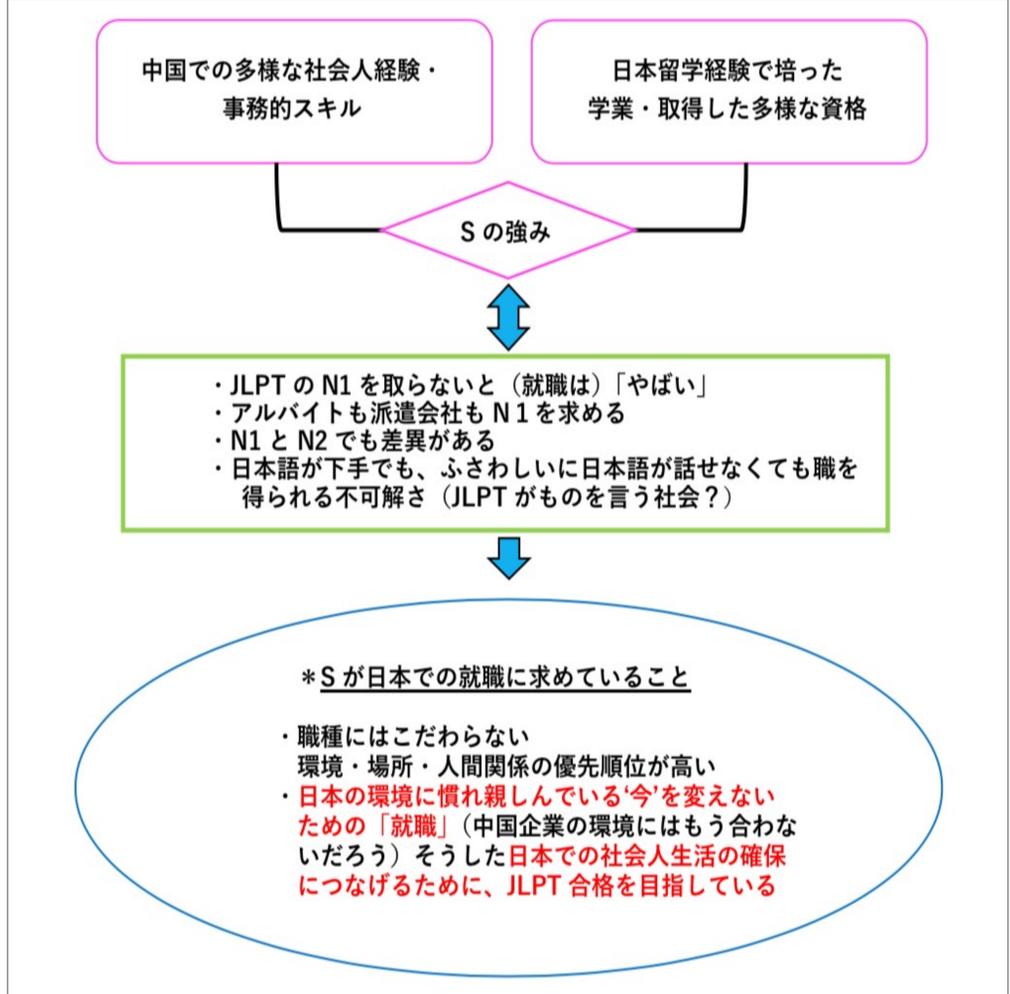
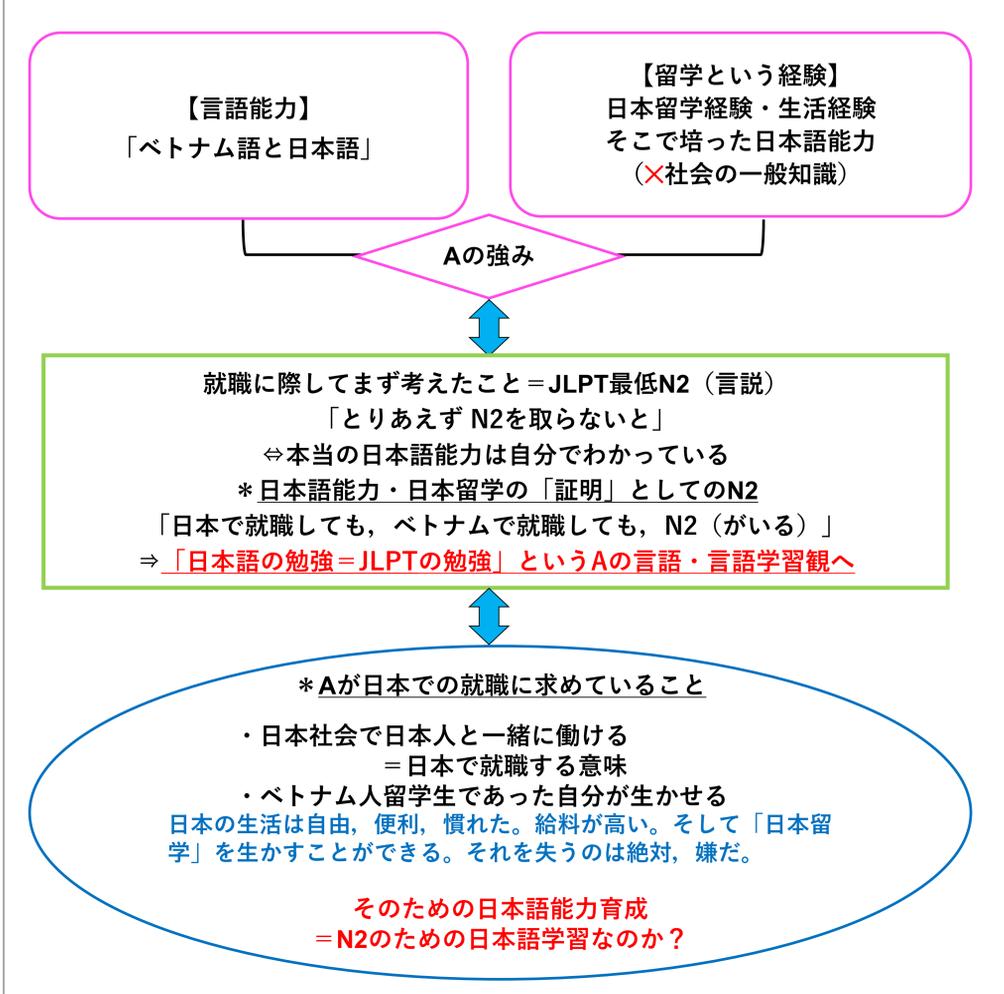
3. 結果

Aさんのストーリー：母国短大卒業後の仕事にやりがいがなく、母親に勧められて日本語学校への留学を決心・日本語学習を開始した。日本語学校卒業時でもまだ日本語が下手で、N3もなく「ベトナム帰っても何もできない」と考え、日本語をさらに勉強するため日本の大学へ進学。当初は卒業後は帰国と決めていたが、3年生になって少し日本で働いて合わなかったら帰国しようと思えるようになった。そうなる「とてつねにN2を取らない」と考え、試験勉強に専念。「日本で就職しても、ベトナムで就職しても、N2」。N2は日本語ができることの証明。

N2合格後、就職先について考え始めた。自分ができるのは翻訳や通訳かなと考えたが「そんな会社入ったらベトナム人ばかり」「日本の社会で働きたいから、会社に入ってベトナム人が多かったら、日本じゃなくてベトナムの会社みたい」だから嫌だった。キャリアセンターから中堅ホテルを紹介され内定。しかし、内定まで時間がかかった上、内定後の会社の対応が冷たく自分は不要かと不安だった。その頃先輩から日本語学校を紹介され、ここなら日本人とのいい関係の中で働け、ベトナム等の留学生の役にも立てると思い、決めた。今はずっと日本で働きたいと考えている。

Sさんのストーリー：幼少期から日本語には親しんできた。高校卒業後、中国国内で就職をし、その後特に職種を限定しないで転職を繰り返した。その中で基本的な事務的なスキルを身につけ、それは自分の力になっている。5年間社会人経験を重ねた後、来日。日本語学校を卒業後、短大に入学した。短大卒業後は日本での就職を希望し、二年次に就活を行う。

就職に有利と思われる秘書検定2級、全経簿記3級、MOSなどの資格取得に臨んだ。その中にJLPTのN1も含まれる。アルバイト経験や就職活動経験を通じて、N1があるのとないのでは就職活動に反映されるものが全く違うこと、N1とN2でもそれは異なるということを実感している。就活に際しては、「1級(N1)取らないとちょっとやばい」として、合格に意欲を燃やす。一方、日本社会で場に合ったふさわしい日本語を使う力には自信があり、それだけに自分より日本語が下手な人が日本で職を得ているのを見ると、就労と日本語力の関係の不可解さが拭えない。就活で目指している職種というのは特になく、中国での社会人経験の中で培われたPCスキルやその場にふさわしい表現を使いこなせる日本語力を活かして、どんな職種や職場でも適応できるという自信があり、ずっと日本企業で働き続けたい。



4. 考察：本研究で対象とした留学生2名は就職活動に臨む際、JLPTのN1,N2を合格していないといけないと信じ込んでいる。しかし、このJLPTが実際のキャリア形成に役立っているかという疑問である。彼／彼女らは、目の前のJLPTに対しては近視眼的に熱心に取り組むが、これまでの留学生活で身につけた日本語を用いて社会で何をしていくのか、自分はどのような「言語」を使ってどのようなキャリアを積んでいくのかを描こうとする意識が希薄である。一方、日本社会でも留学生の採用において見るべき資質・能力があるはずであるにも関わらず、企業が求める日本語能力は「JLPTのN2やN1」という言葉で表現され、それが言説となって流通している。留学生自身もそれに翻弄されている様子がうかがえる。しかし、JLPT合格を目指すことはキャリアに必要な日本語能力習得につながっていると言えるのか。今後日本語教育は、留学生がキャリアを形成するためには言語も含めどのような資質・能力を身につけるべきなのかを検討する必要がある。そして、留学生自身が持っている言語能力を用いてどのようなキャリアを描くのか、自身の複言語・複文化能力をどう活かすかを考える場を提供するようなキャリア支援の日本語教育が求められているのではないのか。

付記：本研究は JSPS科研費19K00747 (研究代表者：寅丸真澄) の助成を受けたものである。
参考文献：寅丸真澄・江森悦子・佐藤正則・重信三和子・松本明香・家根橋伸子 (2018) 「留学生のキャリア意識とキャリア支援の「ずれ」を考える」日本語学校・短大・大学(首都圏・地方)の留学生の語りから『言語文化教育研究』第16巻pp.240-248.
日本学生支援機構 (2020) 「2019 (令和元) 年度外国人留学生在籍状況調査結果」https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2020/08/date2019z.pdf (2021年8月20日ダウンロード)